

# VOS

VITALITY, ORIGINALITY AND SERVICES

長岡技術科学大学広報

DEC. 2004 No.124



**新潟県中越地震について**  
ご報告とご支援への御礼



**特集**

**学生生活**



# VOS

長岡技術科学大学広報

今月の表紙

2004

No.124

CONTENTS

- 3 新潟県中越地震について  
ご報告とご支援への御礼
  - ・ 本学の建物の耐震安全性について
  - ・ 「新潟県中越地震」の発生に伴う被災等状況 経過・対応
- 5 学生支援センターにおけるボランティア活動報告
- 6 特集 / 学生生活
  - ・ 第1回学長と学生との懇談会
  - ・ カナダでの貴重な経験 ~ 海外語学研修 ~
  - ・ 初めての学会発表
  - ・ 秋の学生行事
- 10
- 12 COE報告
- 13 Challenge 起業
- 14 News
- 15 トピックス / 編集後記
- 16 にいがたみてある記



新潟県中越地震について  
—ご報告とご支援への御礼—



特集

学生生活



特集 / 学生生活

## VOSの由来

本学のモットーである，Vitality，Originality，Servicesの頭文字をとって，本学初代学長の故川上正光氏により名付けられました。



## 新潟県中越地震について ご報告とご支援への御礼

長岡技術科学大学学長  
小島 陽

去る10月23日(土)に発生した新潟県中越地震では、多大なご心配をおかけいたしました。お陰様で、その後の余震にも大きな影響を受けることはなく、日に日に元の活気ある長岡技術科学大学を取り戻しつつあります。

本学では、地震発生直後から学生・教職員について安否確認を行いました。その結果、一部に負傷者(軽傷)がおりましたが、幸いなことに人命に影響がなかったことが確認されました。また、学内施設については、校舎や敷地内の一部にひび割れ等がありますが、安全性に影響はないと判断されました。その後、ライフライン(電気、ガス、水道)の復旧に伴い、学生食堂を始め全ての福利施設も通常営業を再開いたしました。そこで、ご父兄の皆様にもご心配をおかけいたしました。11月1日月に授業を再開し、現在に至っております。

不運にも、学生の中にはアパート等の倒壊により住居を失った者などがあります。このような学生達を含めた被災者の支援を行うことを目的に、本学では教職員・学生のボランティアによる「学生支援セ

ンター」を設置いたしました。ここでは、住居相談、生活相談、ボランティア活動参加の仲介などを行うことにより、少しでも被災者の助けとなり、また一日も早く元気なキャンパスを取り戻すべく日夜活動を続けております。くわえて、教職員、学生の有志が発起人となり、本学並びに長岡工業高等専門学校の被災者への募金を呼びかけ、見舞金を贈呈いたすよう皆で協力しているところです。

今回の地震発生に際しては、多数の皆様方から早速のご支援、お見舞いをいただき、また、心暖まる励ましのお言葉を頂戴いたしました。厚く御礼を申し上げます。このご支援の数々が学生・教職員をどんなに勇気づけたか計り知れません。

皆様からの暖かいご支援を励みとし、教職員・学生一丸となって、今後の教育・研究の更なる進展を図っていく所存です。

ここに本学の現状をご報告いたしますとともに、皆様のご厚情に感謝し心より御礼を申し上げます。

平成16年12月1日

### 本学の建物の耐震安全性について

長岡技術科学大学理事・副学長  
(社)土木学会コンクリート委員会委員長)

丸山 久一

大学の校舎や宿舎が造られている鉄筋コンクリート構造物の耐震安全性について、専門の研究者として簡単にご説明いたします。

一般に鉄筋コンクリート建物が崩壊するのは以下の2通りしかありません。

- (1) 建物が基礎(地面の下の部分)から傾いて倒れる
- (2) 一つの階を支えている柱の全てが潰れて、その階が潰れる(通常は1階)

本学の関係する建物を見て回ったところ、(1および2)に該当するものは何もありません。柱や壁に地震によって生じた若干のひび割れが認められますが、鉄筋が設計通りに配置されている場合には、安全性には全く影響がないことを報告いたします。



# 「新潟県中越地震」の発生に伴う 被災等状況 経過・対応

被害等状況（平成16年11月1日現在）

## 1.被害状況

### 校舎研究棟

- ・図書館内部(内装 空調吹出口 照明等)破損有。他の建物は問題なし

### 学生関係宿舎

- ・全ての建物問題なし

### 教職員宿舎

- ・深沢町宿舎( RC-5 )問題なし
- ・長岡宿舎( RC-5 )建物に小破有るが 使用上問題なし ガスに不具合有り。調査中
- ・上条宿舎( 木造 及びコンクリートブロック造 )問題なし

### その他

- ・グラウンド テニスコート等に亀裂有り ゴルフ練習場ネット支柱に傾き有り
- ・駐車場2箇所に亀裂 段差発生 ,1箇所使用禁止
- ・歩行者用中庭( コンクリート平板等 )部分に部分的に陥没数箇所
- ・地上式受水槽( FRP製250t )の上部蓋破損及び底部に亀裂有り 少量漏水
- ・高置水槽破損 機械建設1~4号棟 電気1~3号棟 情報処理センター棟断水 応急修理中
- ・ブロック塀倒壊
- ・外灯器具グローブ落下( 3箇所 )
- ・建物間の接続部破損 雨漏り
- ・建物の所々に亀裂有り

## 2.安全確認

### 学生

2,271人全て安全確認済(けが人3人(軽傷))

### 教職員

379人全て安全確認済み

## 3.ライフラインの状況等

### 電気

10/25(月)22:35復旧

### 水道

10/26(火)通常の40%の圧力で復旧  
10/29(金)通常の圧力に復旧

### ガス

10/28(木)17:00復旧

### 電話

10/25(月)23:30復旧

## 経過・対応

### 地震発生 10/23(土) 17:56

- ・震度6強の地震が発生し学内のライフラインがストップ。
- ・緊急出勤の職員により建物等の被害状況確認(出火 倒壊等なし)
- ・匠陵クラブ(学内宿泊施設)クラブハウスを学生・教職員の避難所として開放

### 地震対策本部の設置 10/24(日)

- ・実施体制を決定し学生・教職員の安否確認作業の開始
- ・研究室内の被害状況の確認
- ・クラブハウス前に支援物資等配給所を設置

### 各大学等からの支援物資の受入及び配給 10/25(月)

- ・県内大学及び各大学等から支援物資が届き 救援物資配給所において避難学生等へ配給。

### 教職員の全員の無事を確認 10/27(水)

### 学生の全員の無事を確認 10/28(木)

### ライフラインが全面復旧 10/29(金)

- ・ライフラインが全面復旧し 食堂・売店等も通常どおりの営業。

### 授業の再開及び学生支援センターの設置 11/1(月)

- ・授業の再開で約8割を超える学生が受講
- ・教職員・学生のボランティアによるセンターの設置。



机の位置がずれ物が散乱した研究室(環境棟7F)



書棚から書籍が落下した附属図書館



ラグビー場では数十メートルに渡る地割れ



支援の水・食糧等を配給するテントを設置



匠陵クラブ(学内宿泊施設)での避難生活



余震が続く中でも元気に自炊する学生達



学生支援センターで生活相談などに対応するボランティア達

# 学生支援センターにおける ボランティア活動報告

学生支援センター スタッフ 木村 悟 隆  
(生物系 助教授)

ボランティア活動でリーダーシップを取り、組織化するには、過去の経験が不可欠である。センター長の齋藤先生は赤十字救急法指導員、留学生センター 松田先生は、10年前の阪神・淡路大震災で2年以上ボランティアをされた。技開センター 大西先生は、本震直後から、学内に設置したクラブハウス前食料配給テントの運営・管理に協力された。木村は“地震WWW”。こうした経験が、支援センターにおけるボランティア活動運営の大きな力になっている。

大学としてサポートする体制が出来たことで、ボランティアの募集や参加が円滑に行なわれるようになった。学生にとっては講義の合間をみながらの活動であったが、11/24現在でボランティア登録者数62名、延べ参加回数が100回余りに達している。留学生が活発にボランティア活動に参加しているのは嬉しい限りである。ただし、11月半ば以降は、試験の時期が近づいたためか、1日当りの参加人数もごく僅かになっている。

初期の段階では、炊き出しや避難所の宿直等の緊急性の高いものが多かった。その後は、住宅の緊急危険度調査のデータやボランティアセンターの受付票のExcel転記、ボランティアセンターの事務局スタッフ、あるいは、復旧の遅れている地域でこまめにニーズを拾ってその場で対応していく活動等に主体が移ってきている。「ゼンザイプロジェクト」は、ぜんざいを食べて技大生・高専生の心と体を温めようとする、内なる試みの一つである。

支援センターでは、スタッフが直接出向いたり、参加した学生の報告によって、ニーズを可能な限り正確に把

握し、参加予定の学生とのマッチングを取って派遣している。現地での活動は総じて円滑であるが、子細は現場に行ってみないと分からない、学生の方が、経験にとらわれず、手足や頭がババッと動く、「若い」ってことが、未曾有の事態の中では最大の武器になる。

間もなく雪の季節、もっとも厳しい1、2月は、本学は学部学生の講義が殆ど無い。この特色を生かして、是非とも学生諸君にはボランティア活動に参加して欲しい。支援センターでのボランティア登録を待っている。

『助けられた』ことで次に『助ける』ことが出来る。一度『助けた』ことで、次はもっと上手に『助ける』ことが出来る。日本の災害ボランティア活動は、阪神・淡路大震災を契機に、この様にして進んで来た、教職員も学生も、大地震という、体験したことのない大きな試練を受けた。これを様々な形で生きものに転化する必要がある。ボランティア活動がそのきっかけの一つになれば幸いである。

最後に、本センターの学生ボランティア活動に対して寄付を頂きました「孜孜の会」(昭和44年卒業の長岡高校有志による会)に深く感謝致します。

学生支援センターホームページ

<http://carbo.nagaokaut.ac.jp/shien/main/index.html>

地震情報ホームページ

<http://nut.fuco.jp/> (携帯可)

日本雪氷学会・日本雪工学会の被災地における越冬のための緊急の提言

[http://snowy.web.infoseek.co.jp/winter\\_eq/](http://snowy.web.infoseek.co.jp/winter_eq/)

も合わせてご一読下さい。



十日町ボランティアセンターの事務局スタッフとして活動する機械創造工学専攻1年の坂田君(写真中央)



「孜孜の会」から学生ボランティア活動に対する支援をいただきました

# 特集 学生生活

## 第1回 学長と学生との懇談会

小島学長と学部学生との懇談会が10月4日月に開催されました。始めに小島学長から挨拶があり、次いで西澤理事・副学長の司会によって意見交換が行われました。丸山理事・副学長も出席しました。懇談会では、学生から、入学後の感想をはじめ、学生生活に関する様々な意見・要望が出されました。その概要をご紹介します。学生の出席者は以下の通りです。

出席者	阿部 香織さん（学部1年，機械創造）	星野笑美子さん（学部1年，建設）
	樋上 聖悟さん（学部1年，環境システム）	三富 圭輔さん（学部2年，機械創造）
	小山 雄生さん（学部2年，経営情報システム）	佐藤 茂さん（学部2年，経営情報システム）
	宮上 和也さん（学部4年，機械創造）	岡村 育子さん（学部4年，経営情報システム）

### 小島学長挨拶

国立大学はこの4月から法人化し、これまで以上に、自主的な向上・改善の努力が求められるようになりました。これまでも本学は、学生の皆さんが大学で快適に過ごせるように、学習・生活環境の整備を進めてきました。講義室に冷房を順次導入したり、廊下の照明の自動感知スイッチを設置したり、トイレの洋式・ウォシュレットを進めたりといったことです。また、研究・教育面でも、21世紀COEプログラムの採択やJABEE（技術者教育認定機構）の受審、更に学生による授業評価アンケートなどにより、内容の充実・発展をはかっています。今日は、今後の大学の活性化のために、学生の皆さんの要望をうかがいたいと思います。気楽な気持ちで懇談会をやりましょう。



（左 西澤理事・副学長 中央 小島学長 右 丸山理事・副学長）



（懇談会の様子）

### 学生からの意見・要望

- 1年では普通科目が多い。専門科目をもっと勉強したい。
- 他の課程の科目に興味があっても単位が認定されないことがある。
- 工業高校の時に取った測定の資格を単位認定してほしい。
- 3年編入後のカリキュラムがハード。単位取得に追われる。
- 3年の1学期は高専でやったことの復習も多い。先に進む授業も考えてほしい。
- 1，2学期に授業が集中して、休みのバランスが悪い。
- 取りたい科目が同じ時間にあったり、必修と重なっていたりすることがある。

### 1カリキュラムについて

### 大学側からの発言

1年では2学期になると専門も入ってくる。大学としては、1学期終了後の課程配属を第1，第2希望の範囲で行い、他の課程の授業を受けることもできるという形で、学生が勉強したいことを学べるようにしている。大学院修士課程まで進むことを考えれば焦ることはない。むしろ幅広く勉強しておいた方が、後々役に立つこともある。カリキュラムの編成は、大学の方でもかなり考えているが、個々の要望や疑問は、ぜひ、クラス担任に相談してほしい。1，2学期への授業の集中は、冬期の通学の便や暖房費節減を考慮している面もある。

## 学生からの意見・要望

技大祭で向陵高校のダンス部に来てもらったが、体育館にしっかりしたステージがあるとありがたい。  
技大祭への学生の関心を高めることや財政面で先生方の支援をお願いしたい。  
技大祭実行委員会の部屋，リサイクル物品置き場がほしい。

2 サークル活動について  
技大祭について

## 大学側からの発言

技大祭の支援は執行部としても考え、アルビレックス新潟の反町監督に講演を依頼したのだが、スケジュールが合わなかった。サークルの部屋については、皆さんの要望を聞いて調整しないとイケない。リサイクルは物品や部屋の管理が大変になると思うので、インターネットの掲示板などで情報を交換する形にするのがよいのではないかな。

## 学生からの意見・要望

2月に寮の集中暖房が切れてしまうので、寒く感じることもある。  
備え付けの家具で生活スペースが狭くなっている。  
寮に入りたいのだが、親の経済的条件で入れなかった。空き部屋があるのに。  
ごみステーションへのごみの出し方のマナーが悪い。  
寮生どうしの交流が少ないのではないかな。

## 3 学生寮について

## 大学側からの発言

暖房については、寮生の負担増に配慮することだが、今後、個別空調を段階的に導入するなど改善について検討していきたい。寮の部屋は全体では不足している。追加募集の情報をこまめにチェックしてほしい。ごみの出し方を含めた寮生活については、寮生が自治能力を発揮するのも大事な。

## 学生からの意見・要望

授業の空き時間に利用できる仮眠室があったらいいと思う。  
喫煙所が講義棟の出入口付近にあるのでは、分煙にならない。  
講義棟の近くに駐車スペースが少ない。  
バスの本数を増やしてもらえないのか。  
大学周辺にコンビニなどが少ない。

## 4 大学施設・通学生活などについて

## 大学側からの発言

リフレッシュのための部屋や分煙についての要望は理解できる。バスは利用者の数が多くなれば増発についてバス会社に要望できるのだが。大学周辺への出店は市街化調整区域の関係で難しい。

懇談会は約1時間半にわたって行われました。最後に、小島学長から、要望の実現の順序もあり、また、すべての要望に対応できるわけではないが、今後も多様な形で学生の皆さんの意見を十分聞いていきたい。クラス担任や体育・保健センター学生相談室などの窓口も利用してほしい、という発言がありました。

## まとめ

若林 敦・語学センター助教授，VOS専門部会長

次回は、大学院生との懇談会が予定されています。

学生の皆さんは、「技大通信 平成16年11月1日号」(学生課発行)でより詳しい内容をご覧ください。また、大学への様々な要望は学生課でも受け付けています。



カナダでの貴重な経験 ~ 海外語学研修 ~

あなたは、もっと挑戦すべきです

倉野 一 俊  
 (電気電子情報工学課程3年)

少し話しては詰まってしまう、少し話しては何を言っているか分からなくなり、黙り込んでしまう。そんな私に、彼らは笑みと共に、そうしてくれました。私はこの、カナダのマニトバで出会った人々の、厳しくも、やさしい一言が今も忘れられません。

8月1日~27日の日程で渡航したマニトバ大学で私は、様々な文化の中で生きる人達と出会いました。ある人は信条から、他人の写真に写る事が出来ないと言い、ある人は、全く初対面の私に、旧来の友人のような気軽さで話し掛け、ある人は、いつもお湯を手放さないという、変わった習慣を持っていました。それらは、今までの私の人生の中で、おおよそ想像のつかないものでした。

また、カナダで過ごした夏は、日本では考えられないものでした。朝は、ゆっくりと明るくなり、気温は低く、時にマイナスになります。昼は、直射日光が照りつける割に涼しく、乾いた空気のおかげで、汗をかくことはありません。そして、ゆっくりと夜になっていきます。完全に真っ暗になるのは、夜の九時を回ってから。日本よりも北にあるカナダでは、朝から夜までの移り変わりが日本よりもずっと遅いのです。バンフへ旅行に行った際も、日本には無い雄大さ、美しさに驚きを感じました。行ってみて初



バンフ旅行にて(筆者は右)



マニトバ大学管理棟

めて気づく事ばかりでした。

さて、肝心の言語習得というところですが、これには、非常に大きな発見がありました。私は、英語に関していくらかの自信がありました。しかしながら、いざ英語を話そうとしても、言葉が口から出てこなかったのです。そういう日が幾日か続いて、私は、私に何が足りなかったのかを、気づく事ができました。それは、英語を使うという事に、私自身まったく慣れていなかったという事です。

つまり、英語という道具を持っていながら、その使い方を全く分かっていなかという事です。どうやって話すのか? その点こそが今回マニトバでの英語集中講座で学んだ、最も重要な事だったと、私は考えています。

今回、マニトバでの生活を通じて、私は様々な経験をする事が出来ました。これらの経験によって得られた、今までとは違う、物の考え方や見方をバネに、これからあらゆる事に挑戦していこうと思います。



初めての学会発表

学会報告を経験して

桐生 紘 輔

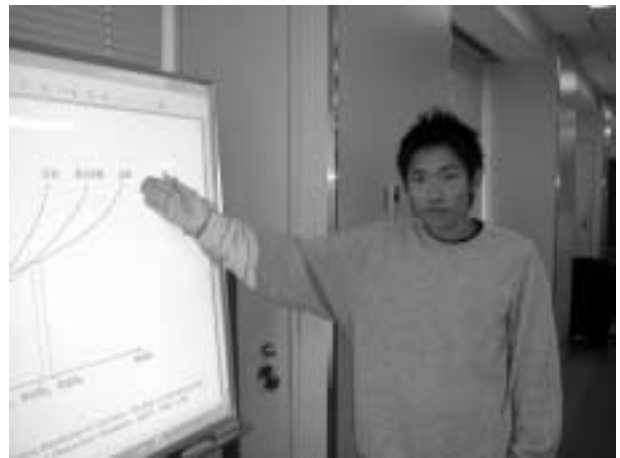
(経営情報システム工学専攻1年)

過日、東京大学にて、「情報メディア研究の潮流と今後の展開」を基調テーマとする、情報メディア学会研究大会で、経営情報システム工学専攻に進学して初めての学会報告を経験しました。

私は、高等専門学校在学中は電気を専攻しており、それから、経営情報システム工学課程の第3学年に編入してきました。経営という物事の考え方や様々なアプローチの方法などに、これまでにない興味を沸かした私は、大学院へ進学し、更に研究を深めてきました。経営情報システム工学専攻は、4月に設置されたばかりで先輩がいないため、不安もありましたが、遠山先生のご指導の下、なんとか発表の舞台までたどり着くことができました。

報告内容は、「取引コストの視点によるデジタル・コンテンツに関する一考察」と題しまして、現在の情報化に伴い経済社会に流通しているデジタル・コンテンツの役割・機能を、取引コストの視点から理論的にとらえるというものです。

学会前日は、少しでも緊張を和らげるため、原稿を何度も読み直し、遠山先生とも入念な打ち合わせをしました。学会当日は、非常に蒸し暑い中、雰囲気飲み込まれることなく、満足のいく発表がで



学会報告前の練習風景

たと思います。

学会終了後、学内では学部生に向けて発表する機会を遠山先生からいただき、経営情報システム工学専攻ではどのような研究をしているのか、その一例を、私の学会報告で発表した内容をもって示すことができました。これから進学する後輩にとって、少しでも参考になればと思います。

現在は、今回の学会報告が決まったので、前回の学会報告の反省や新しい視点を活かせるよう、それに向けて準備を進めています。また、修士論文の中間発表会や就職活動も始まるので、これからますます忙しくなりそうですが、ビジョンをモチベーションにかえて日々精進していこうと思います。

<p>取引コストの視点によるデジタル・コンテンツに関する一考察 A Study on Digital Contents in Viewpoint of Transaction Cost</p> <p>遠 山 紘 輔 Mansu THARA, Kohji KIHJI 長岡技術科学大学 Nagaoka University of Technology</p> <p>なお、デジタル・コンテンツは有形対無形であり、取引の完結には必ずしも物理的移動を伴わない。地理的特徴を無視した低コストでの取引が可能である。また、デジタル・コンテンツが情報通信技術の支援により、有材料非物理的な取引形態を採りうるからであり、したがって、情報通信技術が進展することで、取引コストは、さらに比較的低コストで取引の完結が可能となるのである。</p> <p>キーワード：取引コスト、デジタル・コンテンツ、情報通信技術、特定性、価値、比較優位</p> <p>1. はじめに</p> <p>取引コストは、人的要因と環境の発生変化により規定されるものであり、前者には、規定された合理性、機会主義、習慣などが含まれ、後者は、特定性、非排他性、取引失敗などが含まれる。そして、これらの要因が密接な関係により、取引コストの範囲を決定している。したがって、情報通信技術の進化がこれらの関係に及ぶことで、取引コストは変換し、前記の範囲に収まる方向にシフトする。これは、デジタル・コンテンツが有形と異なり、取引の完結に必ずしも物理的移動を伴わず、地理的特徴を無視した結果として、取引コストの低減が可能になるから説明されるのである。</p> <p>2. 情報通信技術の進化によるネットワーク・シミュレーションの発展、ネットの発展</p> <p>情報通信技術の進化により取引コストが削減されるのは、まず、それによって当事者間のコミュニケーションが容易になるからである。情報通信技術の進化によってネットワークが拡大するにつれて、取引の機会を委譲しているものが、取引を必要とするコミュニケーションと変化し、当事者間の直接取引が可能になってくる。これは、いわゆる仲介者の削減を意味するものであり、当事者間の直接取引が可能になることで、取引の取引コストが削減される。換言するならば、当事者間の取引が削減されるということである。</p> <p>3. 取引対象としてのデジタル・コンテンツ、特定性の緩和</p> <p>さらに、情報通信技術の進化は、特定性の緩和を通じて取引コストの削減を促すのであるが、取引の機会を享受しようとするのが、デジタル・コンテンツ取引対象とする場合のようには、情報通信技術の進化と取引対象との関係が複雑になる場合がある。取引の完結は物理的移動を伴う有形物の場合には、地理的特徴が取引の制約として作用するが、デジタル・コンテンツの場合には、その制約は、情報通信技術の進化によって、むしろ従来の取引対象よりも緩和される。取引コスト理論の観点から見たら、特定性が低くなることで、地理的特徴を無視して当事者間を移動するデジタル・コンテンツは、取引コストを削減する取引が可能なのである。</p>	<p>4. 取引コスト理論における動向</p> <p>取引コスト理論の発展は取引失敗であり、その分析単位は主に取引と見ておられるが、この点について、取引コストの削減は取引の完結を促すという点では、取引コスト理論の分析単位は取引失敗ではなく、地理的特徴を無視した低コストでの取引が可能である。したがって、取引コスト理論の発展は取引失敗ではなく、地理的特徴を無視した低コストでの取引が可能である。したがって、取引コスト理論の発展は取引失敗ではなく、地理的特徴を無視した低コストでの取引が可能である。</p> <p>5. デジタル・コンテンツの価値と取引コスト</p> <p>デジタル・コンテンツとしての価値は、デジタル・コンテンツの価値と取引コストの関係を考察する必要がある。デジタル・コンテンツの価値は、デジタル・コンテンツの価値と取引コストの関係を考察する必要がある。デジタル・コンテンツの価値は、デジタル・コンテンツの価値と取引コストの関係を考察する必要がある。</p> <p>6. 結論</p> <p>取引コスト理論の発展は取引失敗であり、その分析単位は主に取引と見ておられるが、この点について、取引コストの削減は取引の完結を促すという点では、取引コスト理論の分析単位は取引失敗ではなく、地理的特徴を無視した低コストでの取引が可能である。したがって、取引コスト理論の発展は取引失敗ではなく、地理的特徴を無視した低コストでの取引が可能である。</p> <p>主要参考文献</p> <p>(1) 遠山紘輔「情報メディア研究2003」ダイアモンド社、2003年 (2) 遠山紘輔「情報メディア研究2004」ダイアモンド社、2004年 (3) First, M., and Anderson, L., and Wolf, R., "The Fading Boundaries of the Firm: The Role of Information and Communication Technology", <i>Journal of Institutional and Theoretical Economics</i>, 152(1), 1996. (4) Bivona, M., and Hui, H., "Asset Specificity and Economic Organization", <i>International Journal of Industrial Organization</i>, 24(1), 1998. (5) 遠山紘輔「情報メディア研究2003」ダイアモンド社、2003年 (6) 遠山紘輔「情報メディア研究2004」ダイアモンド社、2004年 (7) First, M., and Anderson, L., and Wolf, R., "The Fading Boundaries of the Firm: The Role of Information and Communication Technology", <i>Journal of Institutional and Theoretical Economics</i>, 152(1), 1996. (8) Hui, H., "Asset Specificity and Economic Organization", <i>International Journal of Industrial Organization</i>, 24(1), 1998. (9) First, M., and Anderson, L., and Wolf, R., "The Fading Boundaries of the Firm: The Role of Information and Communication Technology", <i>Journal of Institutional and Theoretical Economics</i>, 152(1), 1996. (10) Hui, H., "Asset Specificity and Economic Organization", <i>International Journal of Industrial Organization</i>, 24(1), 1998.</p>
--	---

# 秋の学生行事

## 第24回 技大祭

9月18日(土)、19日(日)



### 技大祭を終えて

技大祭実行委員長

小山 雄 生 (経営情報システム工学課程2年)

本年度の第24回技大祭も無事終わることができました。今年のテーマは「com」といたしまして、本学と長岡市または近隣の地域との交流の場となるよう企画・運営を行いました。今年は、本学のロボコンプロジェクトによる「ロボコン」、向陵高校ダンス部による「ダンス公演」、昨年からの「NUWAプロレス」を三大企画とし、行いましたが、どれも大盛況で終わることができました。また、恒例となりました「くじ引きビンゴ大会」や良い意味で期待を裏切

られた「餅つき大会」、いずれも多くのお客様に御参加いただきありがとうございました。

最後になりますが、今回の技大祭にいろいろな形で参加していただいた皆様には実行委員会一同、厚く御礼申し上げます。

今回の技大祭では、様々なお褒めの言葉・叱責のお言葉をいただきました。それらを真摯に受け止め来年度の技大祭に生かしていきたいと思っております。

### 実施イベント

- NUWA(日本大学プロレス研究会) プロレス
- 向陵高校ダンス部公演
- ロボ丸
- 研究室公開  
「化学のおもちゃ箱」  
「たたら製鉄実演」  
「生体測定」
- 悠久太鼓愛好会 転太鼓舞 (長岡造形大) 吹奏楽部演奏
- PMCライブ
- 実戦空手道部 合気道部, 剣道部 少林寺拳法部演武
- 体験講座「生け花&押し花小物作り」
- ギダイ縁日
- フリーマーケット
- キックターゲット
- ヘルスチェック
- 貸衣装
- スタンプラリー
- 宝探し
- くじ引きビンゴ
- もち搗きリベンジ
- Golden Night Fever
- サークル展示 学内展示他



実戦空手道部による演武



化学のおもちゃ箱



悠久太鼓愛好会による演奏



吹奏楽部による演奏



押し花小物作り体験



NUWA(日本大学プロレス研究会) プロレス

## 秋季球技大会 9月25日

三 富 圭 輔

(クラブ連絡会会長 機械創造工学課程2年)

平成16年度秋季球技大会はバレーボールとフットサルの2種目が催されました。ソフトボールも行われる予定でしたがあいにくの雨のため、中止となってしまいました。

今年の球技大会には前回まであったドッチボールを止め試験的にバレーボールを行いました。今回は参加チームが6チームと思ったより少なく残念でしたが、これから参加者が増えいくようならドッチボールからバレーボールに種目を変えたいと考えています。

試合の方ではバレーボールが総当たり戦を行い、白熱した試合を繰り広げていました。試合はまるでそうなるように最後の試合が全勝同士の優勝決定戦となり、すばらしい試合となりました。

フットサルは12チームが参加しトーナメント形式で試合を行いました。バレーボールと一緒に行っていただけ最初は体育館の半分で試合を行っていましたが決勝、3位決定戦は体育館の全面を使って激しい試合を繰り広げました。

次回はもっと多くの方が参加し楽しんでいただけるように、準備やセティングなど万全の用意をしていけるよう、クラブ連絡会ががんばっていききたいと思います。



フットサル

## 駅伝大会 10月1日

10月1日の開学記念日、爽やかな秋空のもと、「第24回駅伝競走大会」が開催されました。今年は当日に飛び入り参加した女子学生も含め、学生6チーム、職員1チームの合計7チームで熱戦が繰り広げられました。(1チームは4人一組)

この日は約1.8キロの構内道路を周回しタスキでつなぎました。優勝を目指し結成された各チームの走りは素晴らしく、走り終えた顔はみな達成感に満ち溢れていました。優勝はコメ♥(化学系研究室のチーム)でした。



表彰式風景

## 留学生見学旅行 10月9日~10日

アッカラポン・エッスリ(タイ)

(創造設計工学専攻2年)

今回の旅行は1泊2日の日程で福島県と栃木県、群馬県を訪れました。台風と重なって、2日間とも雨でした。

朝早く集合して、眠ったまま出発しました。バスに乗っている間に、旅行の説明や、行き先の説明や、自己紹介などがありました。おまけに、ガイドさんに歌を歌っていただきました。4時間もかかって、会津日新館に到着しました。すっきり起きた私たちは皆元気よく写真を撮り、会津日新館の説明を聞きました。あまり難しい日本語の説明なので、全然意味が分からない留学生が何人かいるだろう。人数が多いため、3グループに分けて、赤ベコ、こけし、そしてだるまの絵付けを体験しました。私は、忍者ハットリ君を想像しながら、「だるま」の絵付けを体験しました。完成した作品は、結構いけていると思います。この日の昼食は、見た目は巨人サイズで驚きましたが、実際食べてみると足りないくらい量が少なかったです。

次の目的地は、鶴ヶ城です。鶴ヶ城内と周りを見学しました。一番印象的なことは、本物の侍の刀を見たことです。やはり本物はとても素晴しく感動でした。

夜は、宿泊ホテルにある川治温泉に入りました。寒さに巻かれながら、露天風呂に入り、一日の疲れを吹飛ばしました。

翌日、久しぶりに朝食を食べました。その後は、日光東照宮を訪れました。とても大きくて立派な宮だと感じました。

宮内や、想像の象や、眠り猫などを見学しました。来日前から神威にある猿の話聞いたことがあるので、今回実際に見ることができてよかったです。

最後に訪ねた場所は華厳の滝です。霧だらけで全然滝が見えないのでとても残念でした。おまけに2本のソーセージを食べました。そのせいで帰り道の紅葉も見ずに爆睡しました。

今年の旅行の天候はあまりよくなかったけれど、来年もぜひ参加します。



鶴ヶ城にて(筆者は右)



# COE報告

ハイブリッド超機能材料創成と国際拠点形成

## 若手研究討論会

### 「材料におけるハイブリッド化をどう進めるか？」

南 口 誠（機械系 助教授）

標記研究会を9月11、12日に本学で開催し、70名を越える学内外の研究者・技術者が参加した。主に助手、助教授クラスの研究者を対象に、本学COEのトピックスであるハイブリッド超機能材料をどう作り上げていくかを討論することを目的とした。議論を活発にするため、基調講演とパネルディスカッションに主眼を置き、ポスター講演を懇親会と併設して行った。基調講演は、いずれも基礎から最新の研究成果を「ハイブリッド」という切り口で明解に解説された。普段着を着た同世代の研究者の集まりであるため、質疑も非常に活発であり、材料における「ハイブリッド化」を進める上で有意義な集まりであった。参加者からも今後とも続けて欲しいとの声が非常に多かった。

今回の研究討論会は異分野交流の側面が強かった。ある参加者は、ハイブリッド材料に最も必要なのは人材のハイブリッド化ではないかと述べていた。学際的研究には、人材の有機的ネットワーク化は確かに重要である。しかし、ともすれば、異分野交流は、その交流自身が目的化される。今回も、何かにトピックスを絞るべきではないかという意

見もあったが、目的である「材料におけるハイブリッド化を包括的に取り扱う」という、抽象的な新しい概念を構築するためには、その目的を見据えてさえすれば、あえて混沌のままの方がよいのでは？と思う次第である。



議論は盛り上がり、有意義なものでした

# COE報告

グリーンエネルギー革命による環境再生

## 「台湾での国際シンポジウムを共催」

福 田 雅 夫（生物系 教授）

グリーンエネルギーCOEプログラム（GE-COE）では執行部及び事務局の御支援で設けられたCOE留学生奨学制度を活用し、博士後期課程9月入学の留学生6名を受け入れた。十倍に及ぶ候補者から選抜された留学生達は意欲的で、日本での生活を順調にスタートしている。一方、台湾の国立成功大学（台南市）にて9月15・16日に国際シンポジウム「Environmental Biotechnologies on Bioenergy and Bioremediation」（S.S. Cheng教授主催）を共催した。GE-COEからは原田教授（環境）と福田に加え、大橋助教授（環境）、政井助教授（生物）、宮内助手（生物）、井町助手（環境）、COEポスドクの武田君、博士課程の学生5名が参加した。シンポジウムはBioenergyとBioremediationの2会場に分かれ、招待講演者の基調講演と一般講演ならびにポスターセッションがおこなわれた。我々は全員が発表し、教員とポスドクは基調講演（原田・福田）や一般講演を、学生はポスター発表を行った。最後に、会場ごとの最優秀一般講演発表者と優秀ポスター発表者が表彰され、本学のポスター3件も表彰を受けた。8月にタイで開催したCOEシンポジウムで選ばれた最優秀発表者ととともに、最優秀発表

者を来年1月に長岡で開催するGE-COEの国際シンポジウムに招待することになっている。GE-COEでは目標の一つに国際連携を掲げており、今回の国際シンポジウム共催の意義は大きい。



国際シンポジウム打ち上げ後に台南市内寺院にて。前列左から二人目がシンポジウム主催者のS.S. Cheng成功大教授。

# Challenge 起業

## 私の会社づくり その2

時田シーブイディシステム株式会社  
時田修二

「私の会社づくり」と題してVOSに会社設立のお話を載せていただいたのは、平成14年秋でした。それから2年過ち会社も少しずつ売上を伸ばし「その2」を書かせていただくことになりました。私は、9月27日に学位(博士)をいただき無事に学生生活を終えました。大きな目標を一つクリアしたという達成感と安堵感がこみ上げてきました。休学1年半を合わせて4年半の在学期間中に会社設立をすることができ、ご尽力をいただいた方々に感謝しております。2年前のVOSを読み返すと会社設立後間もない時期であり、会社の紹介、運営や産学連携などについて書いていますが不安と期待と自信の無さが所々にでている内容で「駆け出し」でした。

そもそも時田シーブイディシステムズ株式会社の核となる技術「大気開放型化学気相析出(CVD)法」は、故鎌田先生から齋藤先生へ引き継がれ研究がなされてきた技術で、当社は、大気開放型CVD装置を開発販売しています。私は、大学において事業化に必要な装置開発を主に行ってきました。装置の主要部分の開発を行って、装置性能を向上させてきました。しかし実用的な部分で装置の完成度を上げるきっかけを与えてくれたのはお客様の要望(装置の検収条件など)でした。昨年は特に装置出荷数が多く、とにかく装置を納めて調整を行いお客様が納得するまで数回調整に通ったところもありました。そのおかげで、次のお客様にはより早く良い装置を納入することが出来ました。

私は、会社である以上研究に偏った経営はいずれ資本を使い果たすと考え、当初から売上を重視してきました。当社は資本金が1,515万円で小さく、豊富な研究費があったわけではないのですが、研究室の長年の成果を使い地元自動機械メーカーの協力で製品化できたことが最大の強みになりました。そのおかげで会社設立初期から売上を確保できたと考えています。またお客様は当社HP以外に、齋藤先生のご講演・論文

や研究室学生の発表に関心を持たれ、ご連絡をいただくことが非常に多く、営業を支援いただく形になりました。多くのお客様が大学に設置しているCVD装置を見学に来られました。その際会議室が使えないため打ち合わせはポパイ(喫茶室)をよく利用しました。

現在社員は6名(契約社員パート含む)で、その中に長岡技科大出身者が2名います。仕事は、装置開発及び設計、薄膜技術開発、特許調査、試作や雑談(将来の展望をみんなで語る、飲み会の予定)にいたるまでたくさんあります。もちろん私も何でもします。またお客様は大手企業の研究者なので、十分な対応ができる知識と能力を必要としています。現在も技術者を募集しています。ぜひチャレンジ精神のある方は、応募ください。

私にとって大学生生活は、有卦に入る4年半でした。さまざまな問題に対して深刻に考え込むことが無かったのは、忘れっぽい性格と研究室の学生と共に楽しく研究できたことに支えられたと思います。今後は会社の株式公開という大きな目標に向かって皆様のご協力を得ながら進めていきたいと思っています。

最後に研究のご指導さらに会社設立・運営にご支援いただきました長岡技術科学大学並びに化学系齋藤秀俊教授に心から感謝申し上げます。



(筆者は前列右)

### (時田修二さん経歴)

- 1960年 新潟県五泉市生まれ
- 1981年 長岡高専工業化学科卒業
- 1981年 株式会社ニコン入社
- 1994年 日本無機化学工業株式会社入社
- 2000年 恒成株式会社入社
- 2001年 長岡技術科学大学大学院博士後期課程入学  
(化学系齋藤研究室)
- 2002年 時田シーブイディシステムズ株式会社設立
- 2004年 長岡技術科学大学大学院博士後期課程修了

## 小島学長 中国華南理工大学名誉教授の称号授与

平成16年9月25日中国華南理工大学にて、本学小島学長に対し華南理工大学名誉教授の称号が授与されました。小島学長は、長岡技術科学大学・華南理工大学間の教育研究交流を通じ、両大学の交流の礎を築かれるなど、学術研究及び教育の進歩発展に貢献され、今回の華南理工大学との学術交流締結に至るなど多大なる貢献をされました。このような小島学長の多大なる貢献に対し、華南理工大学は小島学長に名誉教授の称号（中国政府承認）を授与しました。



名誉教授の称号授与式（中国 華南理工大学にて）

NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS NEWS

## ヴェトナム教育訓練省副大臣等が来学

ヴェトナムとの大学連携によるツイニングプログラムの拡充等に関する会議及び文部科学省への表敬訪問等の用務を目的として、平成16年10月20日水から10月24日日の日程でヴェトナム教育訓練省副大臣Banh Tien Long（バン ティエン ロン）、教育訓練省国際教育局長Tran Ba Viet Dung（チャンバ ヴィエツ スン）、ハノイ工科大学国際局長Hoang Xuan Lan（ホアンシュンラン）の3名が滞日された。

同一行は、日本コンソーシアム大学関係者との懇談会後、長岡市長を訪問し、その後本学を訪れコンソーシアム会議に出席した。

本学は国立大学初の試みとしてツイニングプログラムに取り組み、昨年3月にハノイ工科大学との間で調印を行った。コンソーシアム会議は、ハノイ工科大学からの編入学試験に合格した留学生の受け入れを本学以外の提携大学でも行おうと開かれたものである。同会議には、日本側のコンソーシアム大学である群馬大、東京農工大、名工大、豊橋技大、九州大の関係者も出席し、ツイニングプログラムの進行状況や今後の展開について話し合いが行われた。

また、今回の来日時に本学の石崎副学長（国際交流担当）がヴェトナム教育訓練省から勲章を授与されました。これは、ハノイ工科大学と本学との間

のツイニングプログラムの創設をはじめ、ヴェトナムと日本の国際連携教育に関する顕著な功績が認められたことによるものです。



コンソーシアム会議風景（本学マルチメディアセンター）



勲章を授与された石崎副学長（在日ヴェトナム大使館）



## 「現代GP」ITを活用した実践的遠隔教育 (e-Learning)部門で選定

文部科学省が本年度から公募した「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」に、本学は「安全社会を創成する先進技術教育プログラム」を「ITを活用した実践的遠隔教育(e-Learning)」部門で申請し、選定された。

本取組の目的は、安全・安心のためのリスクマネジメントに精通する先進的な技術者の養成である。

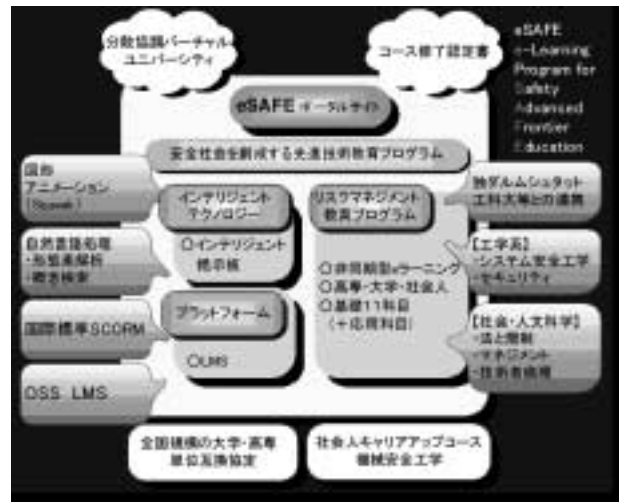
この目的を達成するため、国内で初めて安全・安心に関する工学、法・制度、文化を総合的に教育するeラーニングプログラムを提供する。全国に遍在する教育ニーズに応えるには、非同期型eラーニングの特長を活かした授業配信は効果が絶大である。

さらに、教員・受講者間のビジュアルな質疑応答と対話支援による教育効果向上を図るため、双方向コミュニケーションのためのオンライン掲示板にアニメーション機能及び自然言語処理技術を応用したeラーニングシステムを構築するものである。

現代GPとは・・・

現代GPとは、文部科学省が社会的要請の強い政策課題に対応したテーマを設定に対し、各大学等がテーマの趣旨・目的にそって確実な計画のもとに新たな大学教育改革を図ろうとしている取組を申請。その中から、特に優れた教育プロジェクト(取組)を選定し、財政支援を行うことで、高等教育の更なる活性化を目的としている。

本年度は全国から559の取組の申請があり、86の取組が選定(採択率約15%)された。



## 燃料電池がやってきた

燃料電池自動車が本学に来た。排ガスゼロ、静かな動作音、そしてホンダ車らしいスポーツ仕様の加速性、どれをとっても未来の車にふさわしい造りである。9月27日の試乗会には74名の教職員と学生がセコムホールに集まり、この新しいテクノロジーを体感した。

現在の車社会は、利便性と同時に、騒音と温室効果ガスの排出、NOxやPM(粒子状炭素)といった都市型公害を併せ持っている。さまざまな方式の技術開発が行われる中、どうやら燃料電池が問題解決の切り札になりそうである。

しかし、この技術が即座に社会に浸透するかというと、そのためには数々のブレークスルーが必須である。今後政府が推進する導入・普及段階において、数多くの技術者が参加し研究開発のすそ野を広げて、実用化を加速する必要がある。

今回の試乗会は、長岡市が本年度8番目の環境省啓蒙活動対象に選ばれて実現した。燃料電池車の技術説明に対して活発な質問が飛び交い、次の世代を支える若い技術者が熱

心に見聞きしていた姿が印象深かった。その意味で、この時期に、本学に燃料電池がやって来たことの意義は大きい。

(梅田 実・化学系 助教授)



構内を体験試乗



長岡市の職員による技術説明

## 編集後記

このたびの地震の被害に遭われました方々にお見舞い申し上げます。

大学では人的被害がほとんどなかったことが幸いでした。また建物内は物品が落下して多少破損したものがありました。建物自体はほとんど損傷を受けなかったことも幸いでした。

この地震のため、本号は震災関連の記事を初めに掲載し、特集としての「学生生活」に関する記事をその後に掲載するように紙面を組み換えました。また、Newsやトピックスも最新の出来事なるべく記事に取り入れるように致しました。今後も速報性を重視した紙面作りをしていきたいと思っておりますのでよろしくお願ひ致します。

# にいがた みてある記

シリーズ②

## 深沢宿舎周辺散歩

山田良平（環境・建設系 教授）

数年前から日曜日に約一万歩を歩くこととした。居住する深沢宿舎から歩き出すこともあれば、適当な駐車場を基点として往復することもある。

秋の好天の日に長生橋西詰から堤防を南下したことがある。河川敷に輝く鈴なりの柿の実や、対岸のレンガ色の市役所を眺めつつ歩むと、程なく信濃川と渋海川の合流点に達した。下流から遡る私の行く道はここから渋海川西岸となり、信濃川は遠ざかっていった。堤の道は、永盛橋を越えた辺りから急にひなびて細くなり、河川敷も堤も茫々とススキにおおわれ、その間を川面が空を青く映して見えた。堤が大きくカーブした先を行くと、白く細長い橋梁が見え隠れして近づいてきた。泉島橋と刻まれているのを確認して渡り、この日のゴールとした。

改めて自宅から田畑を抜けて東に直進すれば、渋海川の堤に突き当たる。堤に沿って北に進むと関越自動車道の下をくぐって中沢橋に出る。古く危うげであった中沢橋は、何度か訪れるうちに工事が進み、今は新品である。この橋を渡って東岸に移り、水鳥の番いが意外な速さで水面を遠ざかるのに感嘆した後さらに進むと、例の白い橋梁が現れた。この泉島橋に立つことで、私の中で上下に分かれていた川が一つに繋がった。

中沢橋への方向とは反対に堤沿いに南に進めば渋海橋に達し、これを渡って越路町に入ればちょっとした高みにもみじ園がある。季節には毎年訪れるが、デート中の研



図1 合流直前の渋海川(前)と信濃川(後)

究室の学生と出会って写真を撮ったこともある。人が多すぎず、落ち着いた雰囲気がいよい。

さて、もみじ園と越路中学校の間の道を奥に進むと宝徳稲荷大社への道が示される。こ



図2 子供の遊ぶ「もみじ園」

れにしたがって行くと、いつしか見晴らしのよい丘陵地帯の田畑の間を歩んでいる。まもなく、やや不似合いに、工場のフレアースタックから空に上がる炎が見え、それとは奇妙な取り合わせで、宝徳稲荷の「奥の院」の屋根が目に入る。工場（帝国石油越路原プラント）の前を過ぎて、適当に右折すれば「奥の院」に達する。本殿ほどではないがやはり巨大な朱塗りの建物で、階段を昇れば本学や弥彦山を含めた遠望を楽しめる。同時に、近隣に数多くの採ガス施設が散在していることにも気づくことになる。時にはプラント以上に盛大な炎をあげている施設もあった。調べてみれば、南長岡ガス田は国内最大級で、プラント敷地内ではまもなく火力発電が開始される予定とのことである。



図3 宝徳稲荷 奥の院 近くに上る排ガスの炎

VOS124号（平成16年12月）

編集発行 / 長岡技術科学大学広報委員会(総務部 総務課)

\*本誌に対するご意見等は下記までお寄せください。

〒940-2188 長岡市上富岡町1603-1

Tel.0258-47-9209 Fax.0258-47-9000

E-mail skoho@jcom.nagaokaut.ac.jp

URL : <http://www.nagaokaut.ac.jp/>